今日も、熊本労災病院のHPを訪れていただきありがとうございます。前回の更新から2ヶ月経過しましたが、この間、病院としても落ち着かない日々でもあり、このご挨拶の更新が遅れましたことをお詫びします。

全国でいったん下火となった新型コロナウイルス感染症が、熊本でも7月下旬から急速に勢いを増し、各地でのクラスター発生が重なって、全県での感染者数も増加の一途をたどり、亡くなられた方も5名となりました。前回のご挨拶で、病院の面会禁止を緩めた、と書きましたが、再度禁止になりました。お盆を控え、国や自治体のかたが、例年「大移動」と称される都市部と地方の人の往来について、いろいろなニュアンスで「見合わせ」を勧めています。国が緊急事態宣言を解除して時間が経過しましたが、感染者数に比して重症例が少ないことと、医療提供体制が逼迫していない、などが「あの時とは違う」という理由にされます。高齢感染者が少なかったという事実はありますが、比較的その割合が増えた今でも、幸い重症者や死者の増加は前ほど急峻ではないようです。ウイルスの変異の可能性も言われますが、治療経験の蓄積効果も考えられ、重症者が増えない明確な理由はまだわかっていません。しかし、ゆっくりとは増えていることも事実です。それ以上に問題なのは、感染者の入院病床の逼迫です。報道をみても多くの医療関係者は、「逼迫している」、と警鐘をならし、国のトップは「まだ余裕だ」という解釈を明言します。医療者の一人として、現在の熊本県の陽性患者収容体制に余裕があるとはとうてい言えないと感じています。国などが計算で使う入院病床利用率は、「用意されている病床数」で、入院患者数を除した％になります。「用意されている」というところがくせ者です。3月頃以降、行政などいろいろなところから、当院として「用意できる病床」の調査がありました。それらの総和が上記の割合の分母として使われています。私は、その調査に答える時に、「感染蔓延状況がどのような前提での稼働可能病床数なのか」と、尋ねていましたが、その前提はいつも明示されませんでした。私は、最大1病棟を感染専用病床として使うつもりで回答してきました。もちろん、当院も含めて多くの基幹病院は、がんや救急治療など通常診療を担うわけで、感染が蔓延して陽性患者をどんどん入れないといけない環境になれば、通常診療を制限して一種の災害医療的状況にシフトすることになります。この状態はすでに医療の逼迫に他なりません。国に伝わっている「大きい分母」にはそのような最大限の数字が埋め込まれているわけで、それを根拠にまだ利用率が少ない、というのは実態をつかんではいないと言わざるを得ません。現在、週に数回、県や市、そして多くの県内の関係病院がテレビ会議を行い、患者対応を話し合っていますが、切迫した緊張感が常に漂います。通常の病床を陽性患者入院のための病床に作りかえる、あるいは区分する、などによって病床を捻出している病院がほとんどです。当然、その患者さんたちを看る看護師さんは非感染者をいっしょに看るわけにはいきません。通常とは異なった看護体制を組むことになります。蔓延を前提としてその

ようないろいろな努力をしたあげくならこれくらい用意できますよ、という数字が「用意できる病床」として報告されていた、というのが本当のところと思います。ですから、現在の数字だけをみる人と私たちの感覚の間に齟齬ができるのでしょう。今の政策の進め方をみると、行政のトップ、特に国のトップには医療提供体制の実態がうまく伝わっているのだろうかと少し不安になります。地域的にも近い範囲で陽性者が多く出てきました。また、当院ではないにしろ、県内でも医師や看護師、病院職員の感染者も増えてきて、どんどんウイルスが身近に来たなという実感を持っています。病院職員の行動規制のお願いもしていますが、国の施策を期待しつつ、ウイルス対応で自分たちでできることは最大限努力したいと思っています。患者さんも、注意を守りながら、安心して受診していただければと存じます。

ちょうど、ウイルス感染蔓延の波を縫うように、熊本県南を激烈な水害が襲いました。亡くなられた方、被災されたかたに、心からお悔やみ、お見舞い申し上げます。当院自体には被災は有りませんでしたが、職員には被害に遭われたかたもかなりおられました。1ヶ月が経ちますが、単に浸水しただけでなく、球磨川が激流となって襲った結果、破壊を伴う被災となり復興復旧は容易でないことが想定されます。風光明媚な地域で川とともに暮らしてきた地元の方たちには、極めて複雑な感情が消えないことと思います。当院は、坂本地区の入院患者さんの転院搬送や傷病者の救急医療から始まり、災害拠点病院として全国からのDMAT（災害救援の医療チーム）を受け入れる拠点となるなど、全職員をあげて、通常診療を続けながらの災害医療の実践を行いました。リハビリや各専門看護師などの避難所や地域への派遣など、今後もなお必要な役割を果たしたいと思っております。

気がつけばもう8月です。40年位前になりますが、良く登っていたアルプスでは、白やピンクの花々が、8月になると青系統に変わり、落ち着いた秋を感じさせていました。遠出の全くできない今、テレビでは、そんな山の様子とか、妄想での電車旅、あるいはストレートに地域の美酒美食を見せる、そんな番組が目白押しです。願望をいたずらに刺激するなという人もいるでしょうが、疑似体験を楽しむにはうってつけです。オンライン帰省や飲み会、そしてそんなテレビ番組などで、本当に頭と心を休め、いつもと違ったお盆休みになるのもしかたないかなと思います。